

A. メルッチの「創造力と驚嘆する力」をめぐって

—— 3.11 以降の惑星社会の諸問題に応答するために (1) ——

新 原 道 信

Thinking with A. Melucci's Idea of 'Creativity and Ability to Wonder': Toward Responding for/to the Multiple Problems in the Planetary Society after 3.11 (1)

Michinobu NIIHARA

This article evolved from a research project called "Responding for/to the Multiple Problems in the Planetary Society After 3.11" which is a part of the European Research Network's activities at the Institute of Social Sciences, Chuo University. The project is based on the idea that (re) constructing, against the tide of globalization, a social system for "codevelopment" is urgent and crucial for the 21st century planetary society, in which the multiple problems concerning exclusion and inclusion are increasingly frequent. Throughout the project, I have sought to clarify the ways in which "wisdom for sustainable ways of being" is lived or embodied in so-called "liminal territories" or "composite corporeality," in which the varieties of local residents try to coexist while conflicting, merging, and intertwining with one another. Under such objectives, I conducted research and interviews in certain areas, regarding the autonomy and independence of such localities, the global inter-cooperation among the communities, and the composite/complex/hybrid identities of the community residents, while employing such key concepts as "metamorphosis" and "liminality." The article reflects on the epistemology developed from dialogue with Alberto Melucci and submits a theoretical framework for conceiving and coping with the ongoing problems. In that, the article sets out a preliminary exploration for what might be called "cumscentia (humanities) at moment of crisis."

こんにち必要なのは、問題のなかに予め答えが含まれているような問題解決だけではなく、新たな問いを立てることに私たちの創造的な力を向けることであるということが、ますます明らかになってきている。もし創造性と問題解決とを同一視してしまうと、創造的

活動は、必ずしも所与の問題に対する解答を導くものではなく、むしろそれは提示された問いのレベルにおけるフィールドを常に再構築することを要求するのだ、という事実を見落としてしまうだろう。芸術のように、問題を解決するわけではない創造的活動が存在するし、またある一定の枠内に制約された創造的とはいえない問題の解決だって存在する。私たちの社会は、創造的プロセスを促す個人の資源を発展させていくという試みに直面している。すなわちそれは、リスクを受け容れ、規定できないものを甘受し、既に知られ、分類され、決定されていたかに見えるものを、一時保留にすることを厭わないような能力である。それはまた私たちの心を開き、新たな領域を切り拓くために、自分自身の抑制や不安定さを乗り越えていく能力である。それゆえ創造力とは、それがいかに定義されようとも、驚嘆するという私たちの能力にかかっているのだ。A.メルッチ『プレイング・セルフ——惑星社会における人間と意味』「驚嘆することへの賛辞」より¹⁾

1 はじめに——3.11以降の“惑星社会の諸問題”に応答するために

2014年3月、中央大学社会科学研究所の研究チームの一つであるヨーロッパ研究ネットワークの活動の一環としてすすめてきた調査研究プロジェクトの成果をとりまとめ、『“境界領域”のフィールドワーク——惑星社会の諸問題に応答するために』という共著を刊行した²⁾。

「社会的痛苦の体現者としての病者であり、社会の医者であろうとしつづけたA.メルッチに捧ぐ」という献辞とともに編まれた同書の「縦糸」となっているのは、初期シカゴ学派、P.ブルデュー (Pierre Bourdieu), A.メルッチ (Alberto Melucci), A.メルレル (Alberto Merler), 南方熊楠, 宮本常一, 鶴見良行等によってなされた、社会と個人の“深層／深淵”にまで入り込む質的調査研究の遺産を受け継ぎつつ、これまで30年ほどの歳月をかけて練り上げてきた“境界領域”のフィールドワークの「エピステモロジー／メソロジー」を診断するという意図であった。

他方で、「横糸」となっているのは、“惑星社会 (società planetaria, planetary society)”という同時代認識とかかわる問題意識であった。すなわち、現代社会は“複合・重合”的なひとつのまとまりをもった有機体として形成され、私たちは、「社会的行為のためのグローバルなフィールドとその物理的な限界 (the global field for social action and its physical boundary)」という二重性を持つ“惑星社会”を生きている。既存の枠組みからはみ出す人々の存在がますます可視化するグローバリゼーションのもとで、地域社会や個々人が直面する“惑星社会の諸問題を引き受け／応答する (responding for/to the multiple problems in the planetary society)”ことが、学問が持つべき“責任／応答力”である。そのために、ヨーロッパ、地中海、大西洋、日本、アメリカなどの各地の“端／果て”から、“境界領域”のフィールドワークを行い、“惑星社会”という現在を生きる人間の“生存の在り方 (Ways of being)”と社会の構成のされ方

を見直すという企図であった。

“境界領域”のフィールドワークは、“たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立つ”ことから始められた。その“道行き・道程”で、契りを結ぶことになる他者（智者）と“出会い”，切り結び，喪失の体験と向き合ってきた。それが，当初想像していたとおりの旅程ではなかったとしても，「いままで識らなかったことに会うことはとてもありがたく楽しいことだ」ということを体感した。よりゆっくりと，やわらかく，深く，耳をすましてきき，勇気をもって，たすけあう（*lentius, suavius, profundius, audire, audere, adiuvaré*）という“かまえ（*disposizione*）”で，デイリーワークとしてのフィールドワークをすすめ，知見の「自然な集積」のなかから，“惑星社会の諸問題を引き受け／応答”し得る学問のフィールドを構築することをめざした。

しかしながら，「3.11」は，この「縦糸」と「横糸」を編み合わせていくという「感性的人間的営み（*sinnlich menschliche Tätigkeit*）」への再審をもたらすものだった。本書の終章の第2節『「3.11以降」の“境界領域”と“惑星社会”』において，古城利明は，これまでの私たちの調査研究が持つ「限界（*our limits*）」について，下記のように問いかけた。

“境界領域”論がこの「物理的な限界」を取り込む「エピステモロジー／メソドロジー」を十分に練り上げていないからではないか，あるいは先送りしているからではないか。だが，すでに触れた「3.11以降」の状況を踏まえれば，この問題をいつまでも先送りするわけにはいかない。さしあたりそれは，新原のいうように，“「生存の在り方」を問う」なかで，また「人間の境界線」の揺らぎを問うなかで自覚的に取り上げられるべきであろう。だがその「エピステモロジー／メソドロジー」とは何か。ここに残された課題があるように思う。「惑星社会」から「惑星」を展望に入れた「エピステモロジー／メソドロジー」，それは宇宙論を前提とした身心論なのか，空無を覗き込んだ現象学なのか，課題は深い³⁾。

この古城の問いかけと共振するかたちで，筆者は，序章の「おわりに」で，メルッチの「限界を受け容れる自由（*free acceptance of our limits*）」にふれ，第8章の「おわりに」では，“「惑星社会」と人間の『物理的な限界』から始める」という到達点を示した。これは，“境界領域”のフィールドワークが，《「物理的な限界」「有限性」の問題を，もっとも根源的な課題として受けとめ（*accept*）たうえで学問を始める》ことをなし得ていなかったことの証左でもある。

しかしその一方で，“境界領域”のフィールドワークとして始めた“旅／フィールドワーク（*esplorazione, learning/unlearning in the field*）”の途上で，この惑星上の異なる土地，異なる

人々という生身のフィールドのなかから，“知覚 (percezioni, Wahrnehmungen)” したり，想像したり，ましてや把握することが困難な“複合・重合体”としての“惑星社会の諸問題”の切片・断片に出会っていてもいた。本書の第8章では、「晩期」のメルッチが提唱した「リフレクシヴな調査研究」(本稿3節で後述)に呼応するかたちで，オーランド，カーボベルデ，サルデーニャとコルシカに入るときに遭遇し生起していた“惑星社会の諸問題”とメタレベルのコミュニケーションの意味をふりかえることを試みた。

つまりは，いままさに生起しつつある問題 (the ongoing problems) を“心に抱き／想いをめぐらす (concepire/immaginare, conceiving/imagining)” ために，一度は解釈を確定したフィールドでの知見を，ふたたび諸要素そのものへと脱コード化し，解釈の配置変え (reconstellation/ricostellazione) をしていくという試みである。時間をかけエネルギーを費やし練り上げた，島嶼社会論，“境界領域”論などの《理論的枠組みと「エピステモロジー／メソドロロジー」を手放す》という，learning と unlearning の“閉じない循環 (circularità schiudendo)”を試みようとした。

本稿は，この，《『境界領域』のフィールドワーク》から“惑星社会”論への“パサージュ (passaggio: 移行・移動・横断)”の意味を確認することを目的としている。そのために，メルッチが遺してくれた言葉である「創造力は，私たちの驚嘆する力にかかっている (Creativity relies on our ability to wonder)」をふりかえり，その意味をすくい取ることを試みたい。

メルッチの存命中には，彼が発した「創造力」と「驚嘆する力」という言葉の意味を十分に“受けとめる (accettare)”ことが出来ていなかったという慚愧の念がある。しかしいま，彼が遺した言葉を，彼とのメタレベルでのコミュニケーションも含めてふりかえることで，理解できることがある。それは，「私たちの限界 (our limits)」を「受け容れる (acceptance)」ことに対して「自由 (free)」になること (恐れないこと) が，「私たちの驚嘆する力 (our ability to wonder)」とつながり，そこから，“想像／創造の力 (immaginativa/creatività)”や“創起する動き (movimenti emergenti)”が出てくるのだということだ。

2 “境界領域”のフィールドワークからいかに“惑星社会”論を“始める”のか？

“境界領域”論は，およそ以下のような“道行き・道程”によって練り上げてきたものである。「エピステモロジー／メソドロロジー」双方の生成と錬磨を企図しつつ行われた地中海，ヨーロッパ，南米，大西洋，アジア・太平洋の都市・地域での「“境界領域”のフィールドワーク」は，当初は，“テリトリーの境界領域”——国家が引く境界線の突端，“端／果て (punte estreme/finis mundi)”，に位置する存在であると同時に，ひとつの国家から見ると「他者」，時には前人未踏の地 (no-man's-land) である場所へと境界をこえて行き来する領域——を対

象としてすすめられた。

グローバル化への地域社会・地域住民の応答という点で、歴史的に国境沿いに位置して、国境線の移動や人の移動、文化の“混交・混成・重合”を体験してきた国境地域の諸州や、海に開かれた島嶼地域といった“境界領域”とそこに生きる人々から学ぶことは、きわめて多いと考えたからである。しかしこの、一見、地理的・客体的な問題設定が、実は個々人の身体に刻み込まれた“心身／身心現象の境界領域 (liminality, betwixst and between)”——個々の内なる“深層／深淵”，間主観性，精神の境界の問題性をともなっていることに気付かされた。

さらにこの一連の調査研究のなかで明らかになったのは、“境界領域”の第三の位相 (fase)，すなわち、特定の二者の“深層／深淵”における共感・共苦・共歎 (compassione) の相互行為が (メルッチが言うところの「聴くことの二重性と二者性」)，複数の二者性のつらなりとして現象していく“毛細管現象／胎動／交感／個々人の内なる社会変動／未発の社会運動”と深くかかわるところの“メタモルフォーゼの境界領域 (metamorfosi nascente)”の重要性である。

こうして“境界領域”は、三つの位相 (fase) と重ね合わせつついうならば、①地理的・物理的・生態学的・地政学的・文化的な成層 (stratificazione)，そして、②個々人の身体に埋め込まれ／植え込まれ／刻み込まれ／深く根をおろした“心身／身心現象”の成層、さらには両者の「間 (はざま)」「隙間」にあるところの、③多方向へと拡散・流動する潜在力の顕在化を常態とする成層、という構成を持つ。この“境界領域”のなかの動態——[動きのなかの]“不均衡な均衡”の場として生成しつつある現象を捉えることが、研究課題となった (同書の序章第7節を参照されたい)。

『“境界領域”のフィールドワーク』以降の課題は、既に“出会って”いた“惑星社会の諸問題”に真っ正面から取り組み、とりわけ「3.11以降」の「“惑星社会”と人間の『物理的な限界』から始める」ことである。つまりは、定型化した「問題解決」によって向き合うべき根源的な課題をやり過ごし「先送り」していくという思考態度 (mind-set) から“ぶれてはみ出す”こと。手元に蓄積された“知恵 (sapienza)”や“智恵 (saperi)”を全否定するわけではないが、これまでの「知」の枠組みや組成を一度は手放すことを恐れないこと。ひとまず解きほぐす (unlearning) ことへの勇気を持って、「のみの市」のように“衝突・混交・混成・重合”した、手元にあるばらばらの諸要素でのブリコラージュ (bricorage) を試みること。「人文的な素人 (humanistic amateur)」として、“素人の学 (cumscientia di amatori)”を「普請」し直すことが、「3.11以降」の焦眉の根源的な課題となったのである。

E. サイド (Edward Said) は、その著書『始まりの現象』のなかで、『新しい学 (Principi di scienza nuova d'intorno alla natura delle nazioni)』(初版 1725 年、二版 1730 年、三版 1744

年)の著者G. ヴィーコ (Giambattista Vico) と「対話」しつつ、「始まり (beginnings)」とは何か、それはいかなる「活動 (activity)」「瞬間 (moment)」「場所 (place)」「心構え (frame of mind)」を持つものかについて考察している⁴⁾。私たちは、いかにして“始める”ことが出来るのか。これは新たに何かを創るという「活動」「瞬間」「場所」「心構え」、すなわち「創造力 (creativity, creatività)」への問いかけでもある。

1999年6月、ある国際シンポジウムから自宅にもどったメルッチは、「この10年、社会学は、何かを創造しているのか？」と筆者に問いかけた⁵⁾。メルッチは、主著『プレイング・セルフ』の第10章「驚嘆することへの賛辞」の結びにあたる「旅の途上で (En route..., In viaggio)」を、「創造力 (creativity, creatività)」と「驚嘆する力 (ability to wonder, capacità di meraviglia)」という言葉で結んでいる。「創造力とは、驚嘆するという私たちの能力にかかっている」のである。

この言葉の背後にある「創造的活動」としての学問についてのメルッチの“想念 (idee, immagine)”を、解きほぐしていきたい。というのは、実際に少なからぬ時間を彼とともにしていたとき、「いまここで」発せられている言葉の背後に潜んでいる、過去や未来へと広がる領野、周囲に広がる領野、素粒子のような微細さから宇宙を包含する茫漠たる壮大さへと、飛翔し、弾け、こぼれ、湧きあがる着想の「波」を体感していたからだ。メルッチは、「創造的活動」としての学問を“始める”ために、「これまでの異なる位相で行われた調査の歴史すべて」について、メタ・コミュニケーションのレベルにおける関係性の変化を辿り直そうと考えた。メルッチの全ての“想念”をすくい取ることは出来ないが、「リフレクシヴな調査研究」における一連の“パサージュ (passaggio: 移行・移動・横断)”を、メルッチの遺した言葉から着手したい。

フィールドで出くわす事実や言葉は、最初、ひとつの「景観」のように立ち現れる。しかしその事実や智者の言葉の背後には、舞台に登場することのなかった言葉や想念が在る。さらにその舞台裏の言葉や想念の背後には、身体に刻み込まれた記憶、その背後の構造やメカニズム、さらには同時代に起こった〈コトガラ (のことわり) = ragioni di cosa/causa [事柄の^{ことわり}理]〉が在る。(智者である) 他者を理解するとは、この“多重/多層/多面”の「一所懸命」の構造と動態を理解すること。「景観」として受けとめた「事件」や「データ」や「情報」の背後にある“心意/深意/真意”と“身実 (みずから身体をはって証立てる真実)”を探ろうとすること。かたちを変えつつ動いていく“事柄の理^{ことわり}”を“探究/探求”すること。つまりは、あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え、「景観」のなかの「構造/人間の汗や想い」をすくい取ること。そして、こころとからだをくぐり抜けた言葉を書き/描き遺すことが、「始まり (beginnings)」へとつながると考え、考察を前にすすめることとしたい。

本稿では、この一連の“パサージュ”の“端緒 (inizio e principio)”となる部位を、積み上

げていき、次へとつなげる準備をしていく。

3 「創造力」についてのリフレクシヴな調査研究

メルッチは、『創造力——夢、話、プロセス』（Alberto Melucci, *Creatività: miti, discorsi, processi*, Milano: Feltrinelli, 1994）において、対話的な“想像／創造”の意味に着目した。『“境界領域”のフィールドワーク』の第2章に収録した「リフレクシヴな調査研究にむけて（Verso una ricerca riflessiva）」は、亡くなる前のメルッチが、白血病を発症してからの最も大きな旅となった2000年5月の日本滞在中、投宿先の横浜のホテルで、「昨夜は比較的体調がよかったです。頭に浮かんだことを吹き込んだよ」と言って手渡されたカセットテープのなかにあった言葉のテープ起こし原稿である。

ここでは、社会調査における調査主体と当事者との関係性が、実は、可視的なレベルのみならずメタレベルのコミュニケーションにおいても成り立っていることに着目している。そして、当事者の側のみならず調査主体の側にも複数性と多重性があり、それぞれに固有性を持った個々人同士の二者の関係性が、「遊び（gioco, play）」をもって、ゆるく固定されたピボット・ピンのように揺れ動いていくなかでなされる営為として、社会調査を捉えた。その上で、このプロセスに対して、メタレベルも含めた丹念なりフレクシオン——複数の目で見、複数の声を重ね、固有の二者関係をもとにして当事者にも調査結果を返していく（その意味で、お互いに照り返していく）——を提案した。

痛苦のなかで、何故メルッチは、あえてこの“想念”を遺そうとしたのか。テープの言葉を託された最初は、ただその言葉を“ぐいっとのみ込み、きざみこみ（keeping perception/keeping memories）”，自らの動きのなかで、言葉を“反芻し（rimeditare）”つづけるしかなかった。言葉を遺してもらってから10年かかるといふ実にゆっくりとした歩みだが、あらためていま、言葉のなかの「構造／人間の汗や想い」をすくい取る」ことを試みたい。

メルッチは、「創造力」をテーマとした共同研究において、「自らに対してもリフレクシヴな観察をすすめるなかで、関係性がつくられていくプロセスが持つ固有の性質を認識したいとすることから生じるジレンマ」に直面した。

ジレンマの第1は、創造力というテーマに関してシステム化された研究がそもそも可能なのか、この概念の設定そのものが矛盾ではないのかという疑問である。第2は、モラルにかかわる問題である。すなわち、きわめて内的かつ自発的、高度に主体的な活動である創造の要素を、個々の実際の行為のなかから析出し、そのプロセスを客観化することは困難なのではないかという疑問である。第3の認知する側の問題とかわるジレンマは、私たち研究グループの研究成果は、新たな知を生産しているのか、それとも既に自分たちの

なかに埋めこまれているステレオタイプをなぞっているだけなのかという問題である。

こうしたジレンマに直面したことによって、かえって重要な意味を持ったのは、創造力に関する実質的な定義を確定してしまわずに、当事者との対話や調査メンバー間の対話のなかで、解釈の配置変えをしていくことに対して開かれた理論 (teorie disponibili) を創ろうとしたことだった。

そこでは、異なる文化的背景を持った専門的集団が、それぞれに創造力を生み出している。調査のプロセスにおいては、大きく揺れ動きつつも、客観的な立場に立つということも、リフレクシヴであり続けるということも、避けて通ることは出来ない。自らが生産する知や認識の在り方 (流儀) の特徴に対して持続的な注意を払うというかまを保持しつつ、このエピステモロジーのジレンマのなかで生きていくしかないことを悟った。

調査対象の当事者における創造力を調査研究するという事は、その創造のプロセスを理解するための認識の方法を研究グループ自身が創造しているのかという問題も含めてリフレクシヴとならざるを得なかった。この意味でのリフレクシヴな調査研究の在り方、自らが観察するものへの視線の在り方を自らにも向けるという在り方は、これまで異なる位相で行われた調査研究の歴史すべてに向けられ、これまで、そしてこれからの調査活動のプロセスすべてに対して、徹底的なリフレクションを求めることになる。こうして、調査研究の成果のとりまとめにあたっては、創造活動そのものと同時に、その活動を理解しようとした認知のプロセスそのものにも焦点をあてることとなった⁶⁾。

「創造力」という、簡単には計測が可能ではないテーマに取り組むことによって、「ジレンマ」が顕在化し、既存の枠組みの見直しをせざるを得なくなる。「システム化」された調査研究の方法によって、範囲を確定した対象である「創造の要素」を分節化・分析し、その「度合」を「計測」することの困難に突き当たる。さらには、「内的かつ自発的、高度に主体的な活動」を固定化・対象化したうえで調査する側の「創造力」が問われることになる。ここから、社会理論は、出会った現実に応答していくなかで生成していくものとならざるを得ず、「解釈の配置変えをしていくことに対して開かれた理論 (teorie disponibili)」となる。そのプロセスでは、「回帰」や「反復」も起り得るのであり、「客観的」あるいは「リフレクシヴ」な立場を行き来するしかないのだが、この、“衝突・混交・混成・重合”していく「エピステモロジーのジレンマのなかで生きていくしかない」とすることで、「回帰」や「反復」は、閉じた「円環」からぶれてはみ出し、“閉じない循環 (circularità schiudendo)”となるのである。

4 “心身／身心現象”の学——“生体的関係的カタストロフ”と “生体的関係的想像／創造力”

古城は、“惑星社会”論に向けての「課題は深い」としたうえで、「『惑星』を展望に入れた『エピステモロジー／メソロジー』、それは宇宙論を前提とした身心論なのか、空無を覗き込んだ現象学なのか」と述べた。メルッチは、現代社会の“粗描 (abbozzo)”として、“惑星社会”論の可能性を示唆したが、ひとつの現代社会理論として具体化する前に亡くなった。その遺志を引き継ぎ、私たちが“惑星社会”論を創るにあたって、何が手元にあるかを確認したい。

「宇宙論を前提とした身心論」に関していえば、『ブレイング・セルフ』第4章「内なる惑星」には「心身／身心」という小見出し、そして第9章「地球に住む」には「限界と可能性」という小見出しが立てられ、物理的な「惑星」と「心身／身心」との共鳴・共振についての考察がなされている⁷⁾。「空無を覗き込んだ現象学」という古城の言葉の念頭に置かれているのは、青井和夫の深層理論、とりわけ『小集団の社会学』所収の「禅と社会学」⁸⁾である。

「今日の社会紛争、社会運動、意味の産出にとって、もっとも重要な闘技場 (arena) である身体」というテーマで語った2000年5月の講演で、メルッチは、“生体的関係的カタストロフ (la catastrofe biologica e relazionale della specie umana)”という言葉を発表した。すなわちそれは、自然や社会といった「大きなもの」の話にとどまらない。「思想」や「価値」や「秩序」の話だけでもない。“惑星社会”を生きる個々人の生身の身体そのもの、「内なる惑星」の“心身／身心現象 (fenomeno dell'oscurità antropologica)”の話である。これはマクロに対するミクロという二元論とはことなる次元に存在しているものであり、「制度」や「体制」の深奥、根底、背面——特定の社会や個人を成り立たせている“根 (radice)”の問題と深くかかわってくる。地域社会が根こそぎにされていくなかで、個々人は、激しく自らの“根”を揺さぶられ、“根の異郷化／流動化 (spaesamento/fluidificazione delle radici umane)”，そして“根の流動性／重合性 (fluidità/compositezza delle radici umane)”の行き先を、ひとりひとりが考えていく必要に迫られている。

メルッチが、“生体的関係的カタストロフ”という言葉で捉えようとしたのは、実証科学の対象とするには困難さをもとむ“心身／身心現象の境界領域 (liminality, betwixst and between)”の位相であった。“心身／身心現象”は、人間そのものの (antropico) 「身体と精神、感覚、知覚、意識、胸中、心、魂 (corpo e mente, sensazione, senso, percezione, coscienza, consapevolezza, cuore, animo, anima)」などとしてイメージされる領域 (elemento) の奥深くで起こっている現象である。「身体」は、“生体 (organismo vivente)” そのものとしては (an sich), 「内なる惑星」、コルプス／コルポリアリテイ、メメント／モメントなど、そのなか

に“埋め込まれ／植え込まれ／刻み込まれ／深く根をおろした (radicato)” 社会や文化や自然が成層化した総体である。“心身／身心”は、その総体を捉えようとした場合に、“個・体 (individuo corporale)” / “生・体 (corpus corporale)” として (für sich に) 表象されているものである。

現在の「知」が行使する分解 (Scheidung) の力は、大波のごとくに“心身／身心”を打ち砕き、切り刻み、標本化する。しかし、その生命力が最後の一滴まで奪われ尽くそうとする“喪失”の瞬間にこそ、かえってその内側から、予想以上の反発力が沸き上がってくる。そしてこの“責任／応答力 (responsibility)”に後押しされて、大波にのり、航海しつづける道を選択する。ここに、“生体的関係的カタストロフ”のもとでの“責任／応答力”，すなわち，“生体的関係的想像／創造力 (immaginativa/creatività biologica e relazionale della specie umana)”への「展望」を見出すことが出来る。

メルッチは、システム化した地球情報社会において、かえって、物理的な「惑星地球」、そして「内なる惑星」という双方の“生体的関係的”フィールドが、「新たな問い」を“始める”場所となっていると考えた。グローバリゼーションのもとで、「惑星地球」と「内なる惑星」は、私たちに「有限性」の問題を突きつける。その意味で、「私たちは、まさにはじめて本当の意味で人類史の岐路に立って」いる⁹⁾。

「創造力」についての調査研究は、現代社会を理解するための複数あるテーマのひとつというよりも、“始まり”とかかわる行為である「創造的活動」の当事者と調査者それぞれの“始まり”とその関係性を問題としていた。すなわち、《二重の「惑星」レベルでの「物理的な限界」に直面し「人類史の岐路に立つ」現代人が、“始まり”を招来する場をいかに創るか》という根源的な問題を正面に据えたものだった。

他方で、“生体的関係的カタストロフ”に直面する“惑星社会”においては、「ごくふつうのひとつ (la gente, uomo della strada, ordinary simple people)」が意味を生産し、誰もがいつでもどこからでも「創造力」とかかわることが可能となったという同時代認識があった (『“境界領域”のフィールドワーク』序章と第8章の「おわりに」を参照されたい)。

「創造的活動」への「リフレクシヴな調査研究」は、安定した関係性を常に突き動かし、調査者－調査対象者といった「関係」に“流動性 (fluidità)”をもたらす。「調査対象の当事者における創造力を調査研究するということは、その創造のプロセスを理解するための認識の方法を研究グループ自身が創造しているのかという問題も含めてリフレクシヴとならざるを得ない¹⁰⁾」のである。

5 “深層／深淵”の現象学

本稿冒頭 (53-54 ページ) のエピグラフのなかでは、「予め答えが含まれているような問題

解決 (problem-solving)」と、「新たな問いを立てること (formulating new question)」[「問いのレベルにおけるフィールドを常に再構築すること (restructuring of the field at the level of interrogation)」]が対置されている。ここで-ing 形で示される「新たな問い」は、「解決 (solution)」への道筋が「予め含まれている (already implicit)」ものではない。むしろ、枠組みそのものへの「問い」を発することによって、既存の「問題解決」のフィールドを一度は突き崩し再構造化することを求める。しかもそのやり方は、メタレベルのコミュニケーションという“深層／深淵”における interrogation, すなわち思考の枠組みを異とする他者との間で (inter), 問いを発する (rogare) という、“不協の多声 (polifonia disfonica)”の構造を持つ。

“惑星社会”を生きる生身の個々人の“深層／深淵”を“探究／探求”し、“生存の在り方”を問い直すという試みは、対象を限定したうえでの「明晰さ (Klarheit, intelligible)」をめざすというよりも、現実を大きくつかむ (begreifen, comprehend) ことが出来る「難解さ (Dunkelheit)」をめざす試みである。ここでの「難解さ」とは、「暗く、どんよりとした、暗所、不明瞭な (oscuro, obscurus)」, すなわち“深層 (obscurity, oscurità)”にふれようとすることを意味する。“深層”はまた、遠目に「鳥の目」から眺望するのではなく、「虫の目」でその「穴」あるいは「淵」に臨むものの眼からすれば、「底のないもの (abyssus, abyssos)」という意味で“深淵 (abyss, abisso)”でもある。「新たな問いを立てる」という試みは、場合によっては、新たな答えに向かうことなく「底なし沼 (abyss, abisso)」へと入りこんでいくリスクを引き受けることでもある。

それゆえ、「創造的活動」は、「合理的計算」よりも、「喪失を受容する能力, リスクへの寛容, 限界を見極める分別 (accepting the loss, the generosity of risk and the limitation)」と結びついている。「喪失も展望もないメタモルフォーゼなど存在しない。人が形を変えていけるのは、自己の喪失を進んで受け容れ、好奇心を持って想像をめぐるし、驚きをもって、しかし恐れることなく、可能性と出会える不定形な領域に入り込んでいこうとする、そんなときだけだ」からだ¹¹⁾。「喪失」という否定性と「展望」が、分かちがたく結びついていることを受け容れる (accepting) ためには、「好奇心」や「想像」, 「驚き (驚嘆)」の要素が必要だ。「創造力」は、「リスクと規定できないものを受け容れること (the acceptance of risk, of the indeterminable)」と、「既に知られ、分類され、決定されていたかに見えるもの」を「一時保留 (suspension)」することを厭わないような能力である。

「グローバルなフィールド」が際限なく開けていくというイメージは崩壊し、「物理的な限界」のもとでの「生態系の存続」, 個々人そして社会そのものの「有限性 (finiteness)」を自覚せざるを得ない。しかしこの「制限 (confinement)」のなかにある「境界 (finis)」と向き合うことで、その“端／果て (punta estrema/finis mundi)”から「他者, 差異, 還元できないものを承認する (recognition of the other, the different, the irreducible)」ことへと可能性が開

けてもいくかもしれない。だから、あえて勇気をもって、「差異のただなかで、ともに・生きていくことの責任／応答力とリスク (the responsibility and the risk of co-living amongst the difference)」を引き受けるのである¹²⁾。

「リフレクシヴな調査研究にむけて」においても、「創造力」というテーマに即しての、私のエピステモロジーへの関心は、内に在ると同時に外にも在るような、観察に固有の新たなコードに関する智への関心として表現し得る¹³⁾とした。内にありつつ外にあり、外のものでありながら内にくいこんでいる (endo/esogeno, endo/exogenous) ような学問は、分析能力を持つことが実は義務づけられている「参与観察」(そこにはただ在る自分と分析する研究者の二つが論理的に必ずしも明確な関係性をもたないままに併存している) による関係性の在り方とは違ってくる。それゆえ、「問いに対する私のアプローチは、現象学的にならざるを得ない。というのも、観察者は自身が叙述しようとするフィールドの外側に立つことはないのだし、ましてやそのフィールドにおける労苦や情熱に巻き込まれることを躊躇すべきではないからである。体験の内容だけでなく、そのプロセスにも注意を向けることから、私の視線は、人間の行為の様々な異なった領域が相互にふれあい、相互浸透しているような場所である境界領域に集中することになるだろう。このフロンティアこそが、私が読者を招き入れ、ともに旅をしたいと思っている場所である¹⁴⁾となる。

こうして“惑星社会”を生きる生身の個々人は、“不協の多声”とともに“かたちを変えつつ動いていく (changing form)”ことが求められる。「喪失」「リスク」の「受容」「寛容」とともに「新たなコードに関する智」の「フロンティア」の“流動性のなかにやすらぐ (Flüssigkeit, in sich ruhe)”のである。この“根の流動性／重合性 (fluidità/compositezza delle radici umane)”を捉えるものが、“心身／身心現象”の“深層／深淵”にまで降りていくアプローチは、既に確定した学としての「現象学」ではなく、いままさに、眼前で生起しつつある現象から“始める”学¹⁵⁾にならざるを得ないのだ。

6 “驚きと遊び心と探求心”——学問の使命

では、“閉じない循環”と“ともに創ることを始める (iniziare a cocreare)”学問、“惑星社会の諸問題を引き受け／応答する”学問 (wissenschaftliche ‘cumscientia’) はいかなるものか。

亡くなる直前、ミラノのメルッチ邸での対話のなかで、彼は、「かつて進めてきたような活動的な形での調査研究ではないけれども、いままでフィールドで積み重ねたものを、何度も何度も練り直す (elaborare) 時期だ」と語った。未知の場所、未知の相手、危機的な瞬間、ひとは注意深い観察者となり、この世界と深く出会う。遠き端／果てではじめて出会う深い理解によって思想は練り上げられ深められる。それは一度で終わるものではなく、くりかえし、なんども変奏曲となって生まれかわっていく。

メルッチは、自分の生活や、学生との言葉のやりとりや、フィールドで出会うひとたちとの対話に、膨大な時間とエネルギーを費やした。その作品は、余裕をもって、自力かつ自分のペースで構築されたものではなく、他者とのやりとりがもつ固有のリズムの大海を、小さなオールひとつで漕ぎながら書かれたものである。対話のなかで彼はまた、「これまで千人以上のひとたちと話をしてきた。そのひとりひとりを覚えているんだ。私の書く文章の背後には、いちいち名前をあげてはいないけれど、特定のひととの特定の場面の記憶があるんだ」と話してくれた。特定の相手と対面して「話」をする「対話」や、うちとけた状態で歓談するという意味での「談話」など、いずれにせよ、特定のひととの特定のことがらと結びついたかたちで、思い、考え、言葉にしてみるものの自然な集積のなかで“創造”したものだということである。

それゆえ、「晩期」のメルッチは、「聴くことの社会学——質的社会調査への問い (L'ascolto della Sociologia. Una domanda sulla ricerca sociale qualitativa)」を構想した。「知っている」「しらない」という判断のどちらにもたたず、「どっちつかず」の状態で個々の条件下における暫定的な判断をしつづける。その都度、すべてを組み直し、しかしこれまで蓄積されてきた“智 (cumscientia)”によって、ある個別の文脈においてのみ意味をもつ判断、状況に埋め込まれ、そのなかで“[衝突・混交・混成・重合の果ての]直観 (intuizione composita)”を積み上げていく。それは、認識の対象を設定し、既に確定した「問題解決」のコードに沿って推論を展開する「科学」というよりは、個別科学 (scienza) によって到達しうる範囲を把握しつつ、こうした科学的な知が看過したり、すくい取ることができなかった「例外」や「異端」も含めて、総体としての現実を真偽が緋い交ぜになったその状態のまま“大きくつかむ智 (cumscientia di comprendere)”であり、それは、認識の淵、境界、すきま、ズレに対して力を発揮する。

私たちの根幹にあり、根茎となっている「自然の根 (natural roots)」は、「創造力とメタ・コミュニケーション能力 (ability to create and to metacommunicate)」を介してのみ見出される。さらにこの能力は、「笑いと驚嘆 ((laughter and wonder))」という言い換えがなされ、それは、“惑星社会の諸問題への責任／応答力”としての「倫理」とかかわるものだとする。なぜならそれは、「私たちの行為が持つ限界と可能性を教え、変化を受け容れる勇気 (the courage to accept change)」を与え、何を尊重すべきかという基準を示してくれるものであるからだ。

「禪」の思想に造詣の深かったメルッチは、前述の青井和夫の「禪と社会学」と呼応するような論点を提示している。すなわち、「笑いと驚嘆 ((laughter and wonder))」は、さらに、「遊びと驚嘆 (play and wonder)」へと変奏され、それは「脱魔術化した世界 (disenchanted world)」から追放されたものだとする。求められるのは、「驚嘆を表現する言語 (the language of wonder)」と「澄んだ眼と空の心 (open eyes and an empty mind)」であり、「驚嘆を根付か

せるための場」が必要となる。すなわち、「驚くことの間を創り出す (creating room for wonderment)」「道行き (path)」に働きかけ、「脱魔術化した世界」では標準となっている「充満」した「動き」から、ぶれてはみ出し、「空」の状態で「たたずむ (standstill)」ことへとむかう「リズムカルなパッセージ (rhythmic passage)」を「再び始める (begin again)」こと。「生体的関係のカタストロフ」のもとで、「生体的関係の想像／創造力」とともに、「無心の関係性を再構築する (reestablish an innocent relationship)」こと、「子どもたち、人間とは異なる種、伝統的文化 (children, other species, traditional culture)」に目を向けることである。「創造力」「メタ・コミュニケーション能力」「笑い」「遊び」「空の心」「リズムカルなパッセージ」「無心の関係性」「驚嘆」——メルッチが、「夢見る SF 少年」でもあったことを知ったのは彼が亡くなってからのことだった。彼の作品の背後にあった既存の近代知の枠組みをはみ出していくような「領域横断力／突破力 (Einbruchskraft)」は、好奇心旺盛な子どものような魂と深くかかわっていた。人間以外の「種」へのまなざしを含めた宇宙観のなかで、「類的存在」としての人間の“心身／身心”の「小宇宙」を見晴らし、人間の「有限性」や「限界」を率直に認める伝統的世界観の近くに在り続けた。子どものように目をくりくりと輝かせて、ただ直線的にすすむのではなく、蛇行したり迂回したり、ときに停滞したりすることを楽しみしつつ、「古い魂」をもって、「火山」のように、精神を飛翔させていたのである。“驚きと遊び心と探求心 (a sense of wondering & playing & exploring)”とともに¹⁶⁾。

私たちは不思議なものへの驚嘆を表現するような言語を失ってしまった。純粋な驚きには澄んだ眼と空の心が必要である。しかしそれらは、科学技術を信奉する信者たちにはめったに見られない属性である。私たちは依然として、インダストリアルな文化が生み出した子どもたちであり、しかもユートピアへの情熱を失ってしまった子どもたちなのである。進歩という大いなる駆動力が、歴史の時計を動かすことはもはやあり得ず、私たちは希望を亡くした孤児として取り残されている。私たちは過去に囚われ、依然として未来に望みを託しつつも、信じることへの慰めを失っている。脱魔術化とは、私たちの大都市の郊外を取り巻く空き地 (terrains vagues) に似ている。そこは私たちの文明が排出した残骸が散乱する不毛な砂漠である。

驚嘆の念を根付かせるためには、そのための空間が必要である。私たちは、未だ名前をもたないもののために居場所をつくることにエネルギーを投じ、単に到達点にだけではなくその道程にも働きかけ、充満の状態から空の状態へ、動きから停止へと、リズムをもって移動していくことを再び始めることができるのだ。神々の虚栄や無価値に目覚め、事物の根源が世俗に在ることを知ってしまった脱魔術化した世界において、遊びと驚嘆は、その居場所を失った。しかし、私たちはそれらなしで生きていくことはできない。なぜなら

私たちの生活は、まだ謎に覆われ隠されているからである。不思議なものに驚くこと、場を創り出すということは、可能なものと見知らぬものとを目撃しそれを証言しようとする人々との間につくられる、無心の関係性を再構築する必要があることを意味している。私たちは、子どもたちへ、人間とは異なる種へ、そして伝統的文化へと目を向けることから始めることができるのである。それらは、何もかも全てが暴かれたわけではないこと、全てが語られたわけではないこと、そしてきっと、全てが語られる必要はないということ、私たちに想い起こさせてくれるのだ¹⁷⁾。

付記：ヨーロッパ研究ネットワークの活動のこれまでの共同研究の成果を継承発展させることを意図して開始された新規プロジェクト「3.11以降の惑星社会」チームの協業として、今年度は、メルッチの惑星社会論と探究／探求型社会調査についての検討を行い、チーム全体の研究成果として、新原、鈴木、阪口が代表して執筆している。

注

- 1) Alberto Melucci, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, New York: Cambridge University Press, 1996 (= 2008, 新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ—惑星社会における人間と意味』ハーベスト社), 196 ページ。
- 2) 新原道信編『“境界領域”のフィールドワーカー—惑星社会の諸問題に应答するために』中央大学出版部, 2014年。研究プロジェクトには、A. メルレル (Alberto Merler), メルッチ夫妻 (Anna e Alberto Melucci), 古城利明, 中島康予, 柑本英雄, 田淵六郎, 藤井達也, 石川文也, 中村寛, 鈴木鉄忠, 阪口毅, 新原道信などが参加し、同書の執筆には、古城利明, 中島康予, 中村寛, 鈴木鉄忠, 阪口毅, 新原道信が参加した。
- 3) 同書, 442-443 ページ。
- 4) Edward W. Said, *Beginnings: intention and method*, New York: Basic Books, 1975 (= 山形和美・小林昌夫訳『始まりの現象—意図と方法』法政大学出版局, 1992年), xiv ページ。ここで提起されているのは、根本的な意味での“異端 (estraneo contrapponendo)”から“始める”ことである。ある対立において、それぞれが本質主義・原理主義をとる場合には、互いに相手を「異端」と呼んだとしても、それは、ここでの意味における“異端”ではない。異端 (eresia) は、この本質主義・原理主義が／をもたらず対立そのものに反逆する。その語源的な意味は、αιρεω (奪取, 征服, 占領) と同時に、αιρεομαι (①選択できる, 選択の余地が与えられている, 選挙, ②計画, 目的, 意図, ③学説, 学派, 宗派, セクト, ④選ばれた人の集まり, 委員会) でもある (古川晴風編著『ギリシア語辞典』大学書林, 1989年, 31 ページ)。
- 5) このとき、メルッチは、以下のように言葉を続けた。
F. フェッラロッチェイ (Franco Ferrarotti) や F. アルベローニ (Francesco Alberoni), あるいは A. アルディゴ (Achille Ardigò) など、イタリアで最初に社会学という学問分野を切り開いた人々は、考えの違いをこえて新たな学問を立ち上げようという志向性を共有していた。しかし、1968年の「改革」の後、国家による大学教員採用試験 (concorso) が制度化されるにつれて、この制度は「学界」に浸透し、若手においてはより完全な内面化が見出されるようになった。内面化されたのは、大学で研究・教育に従事する「社会学者」となるためには、理論や方法や学問への姿勢によってではなく、人事のための互助組織としてのみ機能している「派閥」のど

こかに属するしかないという思考の枠組みだ。各大学は出版助成金を確保して、まだ名前の知られていない若い研究者に単著を出させて、「業績稼ぎ」をさせる。内容といえば過去の仕事の枠をこえないものばかりでページ数を増やすことにのみ執心している。こうして形ばかり整えられた「業績」をもって採用試験に応募するわけだが、その際に誰が審査委員になるかでまた「取引」が生じる。たとえば自分の弟子に職を世話しようとするなら、仲間の弟子が応募してきた審査の委員になりいい点をつける。次はその「お仲間」に自分の弟子を押し込んでもらうというわけだ。その他、非常勤講師の斡旋、奨学金の確保など、膨大な「取引」が積み重ねられる。「この閉じた連鎖のなかに入らない限り、この世界での未来はないのだ」という考えが刻印され、無意識の内に、自覚なきご都合主義 (oportunismo) によって行動する。

たしかに若手研究者は「優秀」だ。様々な「知」を消費の対象としてきれいにまとめ、的確な(だが実質のない)「問い」を立てる。しかし彼らが参加しているゲーム(制度)がいかにして成立したのか、つまり自分が拘束されているその枠組みそのものについて考えるという契機を欠いている。残念なことだが、イタリアの社会学は、内向きに変成しつづけていけよう。これまで若い研究者を育てるために膨大な時間とエネルギーを費やしてきた。いま後悔しているのは、あらゆるアウトノミアを彼らに認めた上で、それでもなお、なにはいけないのかをいうことが必要だったということだ。もっと面と向かって怒るべきだったと思う。それほど彼らに刻印された「業績」「効率」「機会」への志向は強いものだった。中世の徒弟制度が持っていた精神(一人の人間について総合的判断を全身全霊をかけて行う)から学ぶべきことはたくさんあるはずだったのに。

- 6) 『“境界領域”のフィールドワーク』, 102-103 ページ.
- 7) 『プレイング・セルフ』, 80-96 ページと 177-178 ページ.
- 8) 青井和夫『小集団の社会学—深層理論への展開』東京大学出版会, 1980年を参照されたい。「禅と社会学」(293-353 ページ)のなかには、「生存の在り方」の問い直し・捉え直しの一つの方向が提示されている。小集団研究の視点から、深層理論を展開した青井は、社会学の対象をパーソナリティ体系、文化体系、物財体系、社会体系の四つに整理し、それぞれの「深化」の方向の具体例として、「欲求」を軸とするフロイトの深層意識論、「論理」的・意味的構造を軸とするレヴィ・ストロースの理論、経済「法則」を軸とするマルクスの理論、「価値」を軸とするウェーバーの理論を挙げる(158 ページ)。次に、青井は、G. ギュルヴィッチ (Georges Gurvitch) の唱える「深さの社会学」の尺度が、観察の難易と自発性・拘束性の度合(つまり、固定性ないしは制度化の度合)にもとづくもので、なぜある層が他の層より「深い」のかという点に答えられないとする(200-201 ページ)。そこで、青井は、「深さ」の連関を把握する理論枠組として「低層」(欲求・快楽)と「高層」(価値・意味)を提示する。この低層と高層の間に、「物質過程としての法則性」と「情報過程としての論理性(規則性)」が位置付けられる。表層は同時に中層でもあり、「深層—表層」の軸と「低層—中層—高層」の軸は、交差させられる。二つの軸を設定することによって、中層においては均衡化しているように見える社会体系になぜ矛盾と緊張が生まれるのかを理解・説明する可能性が開かれる。青井は、ギュルヴィッチより一歩進んで、二つの軸の間の連関と相互作用を明かにしようとする。その際に重要であるのは、ギュルヴィッチにおいては位相間の矛盾と位相内部の矛盾という形で直交する二つの軸が無媒介に置かれたのに対して、青井の場合、二つの軸はたんなる直交の関係となっていないことである。つまり、低層—中層—高層は、同一平面上にあるのではなく、低層と高層は、あたかもスペクトルの両極のごとく、より無意識的・潜在的な深層へと折れ曲がっている。青井は、このような分析枠組に沿って、前述の四つの深層分析の方向それぞれについて、問題の連関と相互作用がどのように把握されているかを検討し、独自の深層理論の方向を提示する。それは、東洋思想、とりわけ「禅」の提起を受け入れ社会学の身体(論)的深化を図るものとしての、「日

常生活世界論」から「超越理論」への方向であった。深層過程の探求が端緒についたばかりであるが、「表の世界だけを見て論理と法則、価値と欲求を分離・拡散させ、裏の世界でそれらが互いに結びついていることを見のがすなら、現実を十全に説明できないのではあるまいか？ 集団のライフ・サイクルを考察してみると、それを再生する原動力は、個人と社会が無意識の低層に沈潜し、聖なる高層を超越するところにあった。また個人と社会が思考の論理と物質の法則から来る既存の必然性を『のりこえる』のも、裏の負の世界を通じてであった。世界は表の半球と裏の半球を合体させてはじめて完全な球として完結する」（273 ページ）のである。cf. Georges Gurvitch, *La vocation actuelle de la sociologie: vers une sociologie différentielle*, Paris: Presses universitaires de France, 1950. (= 1970, 寿里茂訳『社会学の現代的課題』（現代社会学大系 11/日高六郎他編）青木書店。

- 9) Alberto Melucci, "Sociology of Listening, Listening to Sociology", 2000 (= 2001, 新原道信訳「聴くことの社会学」地域社会学会編『市民と地域—自己決定・協働, その主体』地域社会学会年報 13 ハーベスト社), 2-3 ページ.
- 10) 『“境界領域”のフィールドワーク』, 103 ページ.
- 11) 『プレイング・セルフ』, 79 ページ.
- 12) 同書, 178 ページ.
- 13) 『“境界領域”のフィールドワーク』, 102 ページ.
- 14) 『プレイング・セルフ』, 7 ページ.
- 15) 現象学とかかわって、メルッチは、メルロー＝ポンティ (Maurice Merleau-Ponty), 筆者はヘーゲル (G. W. F. Hegel) が、それぞれ若き日の愛読書であることが、対話のなかでわかった。以下では、メルッチにおける「創造力 (creativity, creatività)」という想念を、ヘーゲルの『精神現象学』「序論 (Verrede)」の下記の言葉と重ね合わせて考えてみたい。

もっともたやすきことは、実質のある堅固なものを [外側からいいとかわるいとか] 裁く (beurteilen, 批評/批判/判断する) ことである。難しいのは、それを把握することだ。もっとも難しいのは、[この批評/批判/判断と把握という] 二つの契機を結びあわせて、[自分ならどのようにできるのかを] 表し出す (hervorbringen) ことだ。G. W. F. ヘーゲル『精神現象学』「序論 (Verrede)」(Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1986, c1970), 13 ページより。

ヘーゲルによれば、人間の社会が自己展開することによって、常識的思索者にとっても、分析が思考の基本的前提となった段階に私たちは生きている。私たちの手元には、考えられたもの (ein Gedachtes), 前におかれたもの (Vorstellung), 知られたもの (Bekanntes), 省略形 (Abbriviatuur), 思惟規定 (Gedankenbestimmung) などが存在している (自由—必然, 主体—客体などは言葉としては知っていても内容はわかっていない)。

これらは固定された点 (feste Punkte) として増殖をつづけ、私たちはこの、固定された点としての知の濁流のなかに呑み込まれている。知の専門家たちの役割は、これら固定された点を操作し、「閉じた円環 (Kreis)」としての知の体系 (モデル) を製造する (invention) ことに特化している。その結果、同時代の諸問題についてのうっすらとした危機意識の増大にもなって、(根本的な応答とはなり得ない反応であるところの)「施策」の「モデル」が大量に生産され、それ自体がひとつの「界」を形成する(「外国人問題」業界, 「障害者問題」業界, 「高齢者問題」業界など, 「環境問題」業界など)。この「円環」によって説明可能な世界においては、排除・根絶の対象となる異物以外のすべてのもの(「私たち」)に対して、システム内になんらかの居場所が与えられ、「壊敗から[おのれを]清く守る生」(36 ページ)が「保証」される。

存在はつねに自己完結していない。自己は他者とのかわりにおいて常に否定され限界付けられる。自己が自由になるためにはこの限界付けられた自己を否定し、新たな自己へと進んでいかねば

ならない。自己はもともと自己の内に不等性を含むものである。この不十分さが実践性を生む。それは、「否定的なものの真剣さ、痛み、忍耐と労苦」(24ページ)である。「死を恐れ壊敗から〔おのれを〕清く守る生ではなく、〔固定されることにやすらぐのではなく動き続けるという意味で不断の自己否定を体験しつづける〕死に耐えて死の内に己を保つような生が精神の生なのである」(36ページ)。ヘーゲルにとって、これは単に論理的な述語でなく、日常のレベルでの pain の深い論理的把握、だからこそ否定性は、存在そのもの、現実性の構造なのであり、否定性と肯定性の統一なのである。それゆえこれは、「媒介を自分の外にもたないでかえって媒介そのものであるような直接性であり存在なのである」(36ページ)。

“新しいものを創る”は、既存の対立から“反逆する対象 (L'oggetto rivoltandosi)”となり、“新たに始める”ことであり、“創る”“始める”は、直線的な生成ではなく、循環し、反射し、“返り／帰り／還り”、“顧みる／省みる”プロセスでもある。つまりは、“作る／造る／創る”“始める”は、他者の声を“聴く”こと(ここには既にこの世界にいなかったり、この場にはいなかったり、まだ生まれ来たることのないといったことから非在の他者の声を“聴く”ことも含まれる)、かろうじて受けとめた声の痕跡から染み出るその生命を、生きられたものとするためのみに／そのためにのみ“声を発する”こと、この営みをともしする同伴者と旅をし、対比し、“返り／帰り／還り”“顧みる／省みる”こと、“つたえる”こととのつらなり、“識ることへの動き”のなかにある。

“作る／造る／創る”“始める”は、練りあげる (elaborare) / 創る (creare) / 企図する (progettare) に呼応する。しかし、《企図する (progettare) ⇒ 練りあげる (elaborare) ⇒ 創る (creare)》という矢印の時間の流れではない。

ヘーゲルの hervorbringen という言葉は、“作る／造る／創る”“始める”にあたるものだが、それは一見、到達点として登場する。つまり“始める”ことが到達点でもある (Prinzip = 原理・原則とは到達点であると同時に始めにある) ということが当人にもつかまれている状態で、その時点での限界も呑み込んだうえで企図するという行為であり、「問題解決」ではない。そこからさかのぼって、fassen, すなわちなにごとかを大きくつかむ(把握する)という“道行き・道程 (passaggio)”は、ゆったり、ゆっくりと、蛇行し、滞留し、対流し、のたうちまわり、うねり、澱み、時として奔流となり濁流となり、つまり、自らにも対位し、異なる声を同時にあげ、どこにいても不協和音となり所在のない不均衡な存在として現れ続ける。それは、具体的な生身の人間が日々の現実のなかで、(1)働く (lavorare)、(2)書き遣す (scrivere)、(3)練りあげる (elaborare) / 創る (creare) / 企図する (progettare) といった行為をいったり来たりすることとして現象する。

だとすると、ヘーゲルの言葉の最初に登場する beurteilen, つまり「裁く(批評／批判／判断する)」は、他者との連関／連環の自覚から切り離された「点」として存在すると、きわめて手軽に、「果敢」に、華々しい「宣言」として、凱旋していく危険性を持つ。

メルツは、私たちに内在する(あるいは内面化された)時間の流れを、円として表象される時間、矢として表象される時間、点として表象される時間として説明したが、これもまた決して、円が前近代で、矢が近代、点が現代という矢印であるとはいっていない。それらの関係もまた、円であったり、矢印であったり、点在したりして、うごめいている。

ここから、“作る／造る／創る”“始める”は、点としてのみ存在する「裁く(批評／批判／判断する)」ものとしては、ただ自分こそが真理であると思込み「宣言」し「放言」する(「時と所をわきまえず、場の空気を読むことなく、自分の専門のことばかり話す (fachsimpeln)」「専門家 (Fachmann)」のものとなる。ここから「たやすく」導き出されるのは、《「裁く(批評／批判／判断する)」⇒「把握する (fassen)」⇒「表し出す (hervorbringen)」》という直線的推論による「問題解決」である。この「把握する」と「表し出す」の間に、前述の《企図する⇒練りあげる》を挿入すれば、《「裁く(批評／批判／判断する)」⇒「把握する」⇒企図する⇒練りあげる⇒「表し出す」》

となる。あるいは矢印の段階論を「果敢」に批判し、いや「そのすべての要素があって循環し相互作用しているのだ」と「宣言」することもあり得る。

それでは、“作る／造る／創る”“始める”とは、どんな時間の流れのなかにあるのか。「裁く」、「把握する」、「企図する」、「練りあげる」、「表し出す」はもちろんのこと、円、矢印、点もまた、衝突し、混成し、混交し、重合する。円、矢印、点のどれかによって対象化・固定化し申刺しにするのでも、一律に配分するのでもなく、特定の条件下において流動する組成の様態をおもんばかりつつ、受けとめる。これは別の言い方をすれば、“三つの時間の衝突・混成・混交・重合のなかで、非在の間の現在を生きる”ということになる。cf. 『プレイング・セルフ』「時間のメタファー」「測定することと近くすること」「体験のなかの時間」、11-20 ページ；新原道信『「グローバリゼーション／ポスト・モダン」と『プレイング・セルフ』を読む—A. メルッチが遺したものを再考するために』『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学第 18 号（通巻 223 号）、2008 年；新原道信「A. メルッチの『時間のメタファー』と深層のヨーロッパ『フィールドワーク／デイリーワーク』による“社会学的探求”のために」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学 21 号（通巻 238 号）、2011 年。

- 16) メルッチ自身の“想像／創造の力 (immaginativa/creatività)”と“驚きと遊び心と探求心 (a sense of wondering & playing & exploring, ヘーゲルの言葉でいえば「Ernst をこえた Speilen (真剣さの果ての遊び)」) ”は、“概念詩 (poesia dei concetti)”といういい方が出来るかもしれない。形式論理によって配置された言葉は、「形式の造物主」によって壊死させられてしまうが、概念がいわば詩のような隙間を持って配置された場合には、詩という言葉の語源が声を発することであるように、作り手の思惑をこえた生命力で勝手に増殖していく。そのような、自分の思惑をこえ、裏切られるような形で言葉を配置していくかたちで、メルッチは、人生の本当に最後の時期にいくつかの詩と概念を集めた薄い本をまとめ、“概念詩 (poesia dei concetti)”を遺した。詩集については、Alberto Melucci, *Zénita: Poesie in dialetto romagnolo*, Rimini: Pazzini, 2000; Alberto Melucci, *Giorni e cose*, Rimini: Pazzini; Alberto Melucci, *Mongolfiere*, Milano: Archinto, 2002 を、概念集については、Alberto Melucci, *Parole chiave: Per un nuovo lessico delle scienze sociali*, Roma: Carocci, 2000; Alberto Melucci, *Diventare persone: Conflitti e nuova cittadinanza nella società planetaria*, Torino: Edizioni Gruppo Abele, 2000; Alberto Melucci, *Culture in gioco: Differenze per convivere*, Milano: Il saggiautore, 2000 などを参照されたい。
- 17) 『プレイング・セルフ』, 197 ページ。“境界領域”を行き来し、内にありつつ外にあり、外のものでありながら内にくいこんでいる (endo/esogeno, endo/exogenous) ような観察から言葉を発する彼が、2000 年 5 月の来日の際、帰りの成田 EX の車中で、いつも以上の真剣さとともに、“先を行き／先に逝く”先達として、およそこんな言葉をくれた。

たしかに大学は“智”からほど遠い場所になってしまっているけれど、大学をやめてはいけない。大学教師であることを活かしつつ、他のひとにむけて語りかけつづけなければいけない。異なる社会に深く入りこみメタモルフォーゼを体験した人間はきっと少ない。だから、自分の社会の奥底を、自分のことがらを異なる眼で見ることが出来る貴重な存在だ。異なる存在として自分の場所にて、内側から、声を発しつづけたい。生きて闘ってほしい。

そして、筆者のもうひとりの師友・盟友である A. メルレル (Alberto Merler) は、筆者のイタリアでの在外研究期間の最後の時期であった 2011 年 2 月に、これまで筆者との間で練り上げてきた島嶼社会論とひとの移動に関する「エピステモロジー／メソドロジー」をふりかえり、動きのなかでの“粗描 (abbozzo)”として、以下のような言葉を発した。

私たちは、人間の知性が、抽象的な思考を生み出すことを知っている。しかし、それと同時に、私たちの身体は、この惑星地球という生身の存在に深く根をおろしている。こうして私た

ちは、記憶をたくわえ、その記憶を何度も何度も練り直していく——家族についての記憶、前の世代の記憶、どんな家に住んでいたのか、故郷はどんなところだったのか、どんな気候のどんな場所で育ってきたのか、少年時代、青年時代、青春をどのように過ごしてきたのか、誰と出会い、誰を愛し、誰を憎んだのか。どんな空の下で人生の意味を学んだのか、人生の方向を定める星座をどのようにつくったのか。どんな森、荒野、山の頂、雪、河や海で私たちは出会い、自分を、他者を識ったのか。

私たちは、こうした追憶のフィルターとレンズによって、私たちのなかに深く根付いた生身の現実の意味を学び、問いを発する。“複合し重合する私 (io composito)” は、厳格に存在しているかのように見える「境界線」をあまり気にすることもなく、いまとなつては慣れ親しんだ境界の束を越えていく。そして、自らの旅の道行きで獲得した固有の見方に従いながら、いくつもの異境を越え (attraversare i confini)、「厳格な境界線」の限界を抜け出ていく。たとえ「ノーマルではない」「違っている」「マイノリティだ」「不応だ」といわれても、異境を旅する力とともに生きてゆく。

仮定の「正常さ」や「画一性」から見たらじっくりこない

“社会文化的な島々”として、

たとえこの真剣なコンチェルトの試みが、

トータルには理解されていないとしても、

より多くのひとの耳に、この“不協の多声”が届くことを願いつつ、

(A. メルレル・新原道信「海と陸の“境界領域” —日本とサルデーニャを始めとした島々のつらなりから世界を見る」新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク』, 86-87 ページ)

“境界領域を生きるひと (gens in cunfinem)”である二人の師友が、それぞれに、異なる言葉、異なる眼で、同じものを見て、“創る”“始める”を試みているのだと確信している。